

4) アジモ場造成の方法と問題点

以上これまで検討してきたことから、アジモ場造成の方法については次のように結論される。アジモ場の造成対象種としてはリュウキュウスガモとベニアマモが適している。アジモ類の生育条件の一つは干出ししないことが必要であり、したがってこれらの種類を対象種とするアジモ場は最大干潮線下か或いは干潟域においては、例えば掘削して滞水させる等の処置を施した場所での造成でなければならない。アジモ場の形成と安定した生育には底砂の堆積の年変動が3cm以下であることが必要であり、また8cm以上の変動のあるところでは藻場は形成されないものと思われる。

このことから、アジモの生育を制限する大きな因子であると結論される漂砂や或いはその他の因子（例えば淡水や陸土による濁り等）を排除することができれば、それ自身の持つ生長力によって、アジモ場が形成されるものと思われる。

しかし現時点ではこれらの因子の排除は技術的にも、また経費的にも即応できない困難なことからのである。

天然モ場における窒素肥料の施肥によって、アジモの生長にいくらかの効果がみられるけれども、それ程大きくない。無施肥移植株にみる限り、その生長は速くなく、移植によってモ場が形成されるまでには2ヶ年以上を要するものと思われる。

上述のように現時点での実用化はむづかしいが、一応アジモ場造成の一方策を提示することができた。

そこで、アジモ場造成試験については本年度を以って終了する。

5) 要 約

- ① 前年度に引続き恩納村字屋嘉田漁場において、アジモ場造成の技術研究を行った（図-1）。
- ② 漂砂の動態について、恩納村字屋嘉田漁場の南側と北側の間に漂砂の季節的移動があることが推察された（第1表、図-3、4）。
- ③ アジモ場以外の砂礫帯では漂砂による地盤の変動が大きい（年変動8cm以上）ところが多く、またアジモ場の中では小さい（3cm以下）ことが、標尺柱による調査で観察された。したがって漂砂の動態とアジモ場の形成の間には強い関係があることが確められた。
- ④ 干潟の掘削池における移植試験から、移植株は定着するけれども、定着率は著しく小さかった（第2表、図-6、7）。
- ⑤ 移植株の定着率が小さい原因として、砂礫の堆積と逸散による生育基盤の変動が第一に指摘でき、またそれ以外にも例えば淡水や濁り等が制限因子として存在することが推察された。
- ⑥ 根茎の伸長にみる限り、移植株の生長は速くない。このことから仮に1m間隔に植え込む

芝植え、の方法では藻場の形成に最低2ヶ年を要するものと想定された(図版Ⅲ-6、図-7)。

⑦ 天然藻場で窒素肥料を供給することによってアジモの生長がいくらか促進されるようであるが、その効果は大きくない(第3、4表)。

以上のことからアジモ場造成の方策を提示することができた。

アジモ場の造成には、天然藻場の形成を促進する必要がある。天然藻場の形成を促進するためには、窒素肥料の供給が有効である。窒素肥料の供給は、アジモの生長を促進するだけでなく、天然藻場の形成にも有効である。窒素肥料の供給は、アジモの生長を促進するだけでなく、天然藻場の形成にも有効である。窒素肥料の供給は、アジモの生長を促進するだけでなく、天然藻場の形成にも有効である。

アジモの生長	天然藻場の形成
1954年	1954年
1955年	1955年
1956年	1956年
1957年	1957年
1958年	1958年
1959年	1959年
1960年	1960年
1961年	1961年
1962年	1962年
1963年	1963年
1964年	1964年
1965年	1965年
1966年	1966年
1967年	1967年
1968年	1968年
1969年	1969年
1970年	1970年
1971年	1971年
1972年	1972年
1973年	1973年
1974年	1974年
1975年	1975年
1976年	1976年
1977年	1977年
1978年	1978年
1979年	1979年
1980年	1980年
1981年	1981年
1982年	1982年
1983年	1983年
1984年	1984年
1985年	1985年
1986年	1986年
1987年	1987年
1988年	1988年
1989年	1989年
1990年	1990年
1991年	1991年
1992年	1992年
1993年	1993年
1994年	1994年
1995年	1995年
1996年	1996年
1997年	1997年
1998年	1998年
1999年	1999年
2000年	2000年